

せんぐり食い

むかしむかしの早良に、腕利きの獵師がいたそうな。

ひがな一日、鉄砲を持って森や野原を駆け回り、鳥やけものをた〜くさん仕留めていたそうな。

「おいらの狩の腕前は、早良で一番たい！」

獵師は自分のことをいつも村人に自慢してはこう言っておりました。

さて、そんなある日のこと。

「天気もよし！今日も、しこたま獲物を仕留めてくるか〜」

獵師は、いつものように鉄砲をかついで山へと入って行きました。

しかし、どうしたことでしょう。

その日に限って、歩けど歩けど雉一羽、狸一匹、虫の姿すらありません
まるで、生き物たちがすべて消え失せたような静か〜な山でした。

「今日は... な〜んか、おかしかね...」

一日中歩き回りましたが、結局、なんの獲物にも出会えませんでした。

「あ〜、もうよか。今日は帰るばい」

そこに、ちよろちよろと一匹のミミズが這い出てきました。

「おやまあ、やっとおったのがミミズ一匹かい...」

そう思っていると、今度は...

ぴょこぴょこと一匹のカエルが飛びだしてきました。

あっという間にそのミミズをぱっくりこ、と、呑みこんでしまいました。

「おやまあ」

そう思っていると、今度は...

によろによろと一匹のヘビが、這い出してくるなり、カエルをかつぱりこ。

「おやまあ〜」

そう思っていると、今度は...

のそのそと草むらからタヌキが現れました。

「しめた〜、やっとお獲物があつたばい！」

素早く鉄砲をかまえ、タヌキを撃とうとしました。

ところが不思議なことに、狩の名人のはずの獵師は、
鉄砲の引き金を引こうにも指に力が入りません。

「ありゃ、ありゃ〜、どげんしたこつたい？」

そのうえ、タヌキはなぜか背中にまな板をかついでいます。

「まな板.....？ あっ！ミミズをカエルが喰って... カエルをヘビが喰って... ヘビを
タヌキが喰ったけん、

そんな次に、もし、おいらがこのタヌキを鉄砲で撃ったら、またそんな次のだれかに今度はこのおいらが喰われるとじゃなかるうか？」

その時、突然、タヌキの姿がでっかい一つ目入道に変身しました。「ひゃ〜」

猟師はびっくりして腰を抜かしました。

「その鉄砲で、もしわしを撃っとったら、わしは、このまな板でおまえを料理して喰うところじゃったぞ」

「ひゃ〜」

猟師は、鉄砲を放り出し、山道を転がるように駆け下りていきました。

それからというもの、猟師は二度と猟に行くことはなかったそうで、

猟師のこの話を聞いた村人たちもまた、猟をする人はだれひとりもいなくなったとさ。